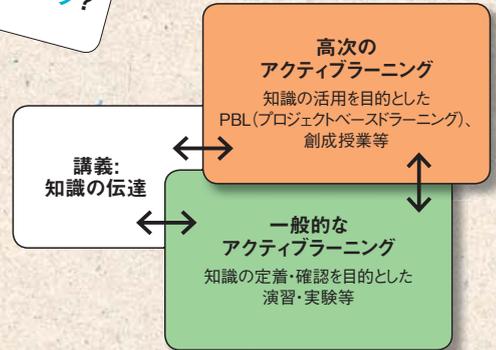


高大接続のキギは
いまアクティブラーニング?

大学でさらに広がる 「アクティブラーニング」

大学教育で年を追うごとに広がっているのがアクティブラーニングである。今や必要性が啓蒙される段階から、本格的普及期に入ったとも言われるが、それだけに単にアクティブな要素を取り入れるだけではなく、教育の実践的な効果が問われるようになってきたとも言える。大学を中心に、アクティブラーニングの現段階をレポートする。

取材・文／教育ジャーナリスト 友野伸一郎



資料出所「アクティブラーニングで学生が成長するのか」 河合塾編著

教授者中心から学習者中心へ 階層型教育からネットワーク型教育へ

大学教育で、さらにアクティブラーニングが広がっている。その理由はさまざまに指摘されているが、改めて整理しておくこと以下のようになる。

第一に、大学のユニバーサル・アクセス化である。現在、日本の大学進学率は50%を超え、マーチン・トロウはこれをユニバーサル・アクセス段階として、15%以下のエリート段階、15%～30%のマス段階と明確に区別したことは知られているが、その核心は、従来とは異なる層が大量に大学教育を受けるようになってきているという点にある。つまり、動機、目標、学力、学習習慣が低い多くの学生にとって、旧来型の一方的な講義だけでは授業が成立しないという問題である。

しかし、これは学力の低い学生を受け入れるユニバーサル・アクセス型の大学のみの問題ではない。高学力の学生を受け入れている大学においても、アクティブラーニングの導入が求められているのである。

つまり第二に、社会に求められる能力の変化が挙げられる。『多元化する「能力」と日本社会 ハイパー・メリトクラシー化のなかで』(NTT出版 本田由紀)によるとメリトクラシー(産業社会)とハイパー・メリトクラシー(ポスト産業社会)では必要とされる能力が異なることが指摘されている。

メリトクラシーで必要とされる能力は、「基礎学力、標準性、知識量・知的操作の速度、共通尺度で比較可能性、順応性、協調性・同質性」であるのに対し、ハイパー・メリトクラシーで求められる能力は「生きる力、多様性、意欲・創造性、個別性・個性、能動性、ネットワーク形成力・交渉力」である。メリトクラシーで必要とされる能力は、知識伝達型の教育や暗記型の学習で達成可能であるのに対して、ハイパー・メリトクラシーで必要とされ

る能力は、そうではない。そのためにこそ、アクティブラーニングが求められるようになってきたのである。

さらに第三が、知識基盤社会の到来である。そこでは、知識をどれだけ多く暗記しているかではなく、知識をいかに活用できるかが求められる。知識はクラウドの中に存在し、教員も学生も等しくアクセスできる。従って、高度で正確な大量の知識を頭脳にストックする大学教員が、一方的に学生たちに知識を分け与えるという構図の教育は機能しなくなる。

こうした事情に対応するためにアクティブラーニングは広まっているわけであるが、その意味するところは、教授・学習観の転換である。京都大学高等教育研究開発推進センターの溝上慎一准教授は指摘している。

それは旧来の教授者中心の教育から学習者中心の教育への転換である。学生が聴いていたか、授業でどう変わったかにかかわらず、教員が何を喋ったかだけが問題とされた教育観から学生がその授業を通じて「何ができるようになったのか」が問われる教育観への転換の中心にアクティブラーニングが位置づいているのである。

そして、そのことは、従来の階層型学びからネットワーク型の学びへの転換が進んでいるということの意味している。

図1は、ハーバード大学教育学大学院デビッド・パーキンズ教授による「21世紀型スキルを身につけるには従来の『階層型の教育』よりも『ネットワーク型の教育』が適している」という提言を図式化して整理したものである。

「階層型」では科目が分断され、かつ科目の中では教員が知識や情報源を独占し、一方的に与えるという階層的な図式であるのに対して、ネットワーク型では科目がそれぞれに連携し、かつ科目の中では情報源は教員と学生が等しくアクセスでき、学生は学生同士や学生と教員との相互作用によって学ぶのである。

高次のアクティブラーニング 一般的アクティブラーニング

では、そもそもアクティブラーニングとは何か。さまざまな定義が可能だが、筆者は溝上准教授の「単に講義を聴くだけの100%受動的な授業でないものはアクティブラーニング」という定義を支持する。

そしてアクティブラーニングは、目的に応じて専門知識を活用して課題解決を目的とする「高次のアクティブラーニング」と、知識の定着・確認を目的とする「一般的アクティブラーニング」に分類して捉えるべきと考えている。この2種類のアクティブラーニングは目的も形態も手法も異なり、それらを分別しないで同列に扱えば混乱をもたらすからである。

さらにもう一つ重要なポイントは「深い学び」につながることである。「深い学び」とは、授業の中での新たな経験や得た知識が、学習者がそれまでに持っていた知識と関連づけられ、新たな世界像が構築されていくことを指す。講義内容を丸暗記し、試験が終われば忘れてしまうような「表層的な学び」と対照的な概念である。専門知識を活用して課題解決を目的とする高次のアクティブラーニングは、本来、このような深い学びを学習者にもたらすはずのものなのである。

大学のアクティブラーニングが機能しているか を知る5つのポイント

では、アクティブラーニングが効果をあげるためには、どのようなことが具体的に必要なのだろうか。それは高校側が大学教育に対してもつべき視点とも共通すると筆者は考える。

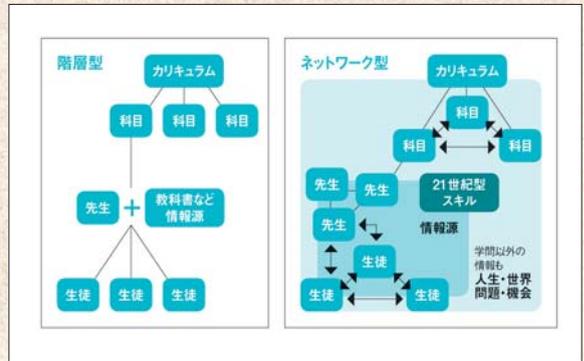
①教育目標の明確化

当たり前だと思われるかもしれないが、実は多くの大学でこれができていない。一つの目的に対して、目標はその目的を達成するために複数設定される。例えば、「グローバルに活動できるビジネスパーソンを育成する」という教育目的を実現するために、「TOEIC(R)テストスコア○○○点以上に到達させる」「マーケティング理論から、世界市場で起こっている現象を説明できるようになる」などの教育目標を設定するわけである。ところが、多くの大学では教育目的は謳われていても、「○○の能力を身につけさせる」というような教育目標が設定されていない。だから、アクティブラーニングを行う場合でも、何のために行うのかが曖昧になり、「学生が盛り上がっていたのでよかった」ということに結果しがちなのである。しかも、教育目標が設定されていないならば、そのプログラムなりカリキュラムなりを評価し、その弱点を補うための改革も恣意的なものにならざるを得ない。要するにPDCA(計画・実行・評価・改善)サイクルが回らないのである。

②教員の協働

学部・学科として教育目標が設定され、教員間で共有されていれば、その達成のために教員間の協働が必要になる。教員

図1 階層型からネットワーク型の教育へ



同士がバラバラに好き勝手な内容を教えていたのでは、教育目標の達成は困難だからである。

③科目を越えた高次のアクティブラーニングのカリキュラム設計

つまり、専門知識を活用し課題解決を目的とした高次のアクティブラーニングでは、他の科目で習った専門知識を活用することを前提に設計されなければおかしいのである。そして、他の科目で知識として得たことが、このアクティブラーニング科目で活用されることによって学習者にとって「腑に落ちる」、つまり「深い学び」につながるのである。

④高次のアクティブラーニングの継続性

従来の大学教育では、3年次か4年次に専門ゼミや卒業論文が始まってから、初めて学生は専門知識を活用し課題解決を目的とした高次のアクティブラーニングに取り組んでいた。1~2年次は教養科目や専門科目で知識を一方向的に受け入れるという在り方が一般的だった。しかし重要なことは、1年生は1年生なりの知識で、2年生は2年生なりの知識で、課題解決に取り組むことである。そうすることで、4年次に1回限り取り組むだけでは身につけにくい課題解決力や対人能力が高次化していくからだ。

⑤一般的アクティブラーニングのできるだけ多くの授業への導入

これは、従来の知識伝達型の講義のみの授業に、討議やグループワーク、ミニツツペーパー、小テストなどの一般的アクティブラーニングをできる限り盛り込むことで、100%受動的な授業を無くしていくことを指している。実際、世界的にもたとえばスタンフォード大学メディカルスクールでは、講義のみの授業は全廃され、その結果として学生の成績向上が実現されている。また日本でも金沢工業大学の「総合力ラーニング」では、すべての科目で、講義だけに終始しないで、何らかのアクティブラーニングを行うことが決められている。

日本の大学には実際に どのように導入されているか

河合塾大学教育力調査プロジェクトでは、2010年から継続して「大学のアクティブラーニング調査」を行っている。全国の非資格系の約2000学科に対し質問紙でカリキュラム調査を行い、

図2 大学のアクティブラーニング導入状況

系統	大学	学部	学科	評価の視点					調査年度
				I-1	I-2	II-1	II-2	III	
社会・国際学系	共愛学園 前橋国際大学	国際社会学部	国際社会学科	◎	◎	◎		○	2011
	立命館大学	国際関係学部		◎	○	○		○	2012
経済学系	創価大学	経済学部		◎	○	◎	○	◎	2010
	武蔵大学	経済学部		◎		◎		○	2010
	名古屋学院大学	経済学部	総合政策学科	◎	○	◎		○	2012
	大阪市立大学	経済学部		○		○	◎	○	2011
経営・商学系	産業能率大学	経営学部		◎	◎	◎	◎	◎	2010
	立教大学	経営学部		◎	○	◎	○	◎	2010
	立命館大学	経営学部		◎	○	◎		○	2010
文・人文・外国語学系	日本女子大学	文学部	英文学科	◎	◎	◎			2011
	日本女子大学	文学部	日本文学科	◎	◎	◎	◎	○	2012
	新潟大学	人文学部	人文学科	○	◎	○		○	2011
	愛知淑徳大学	文学部	英文学科	◎	◎	◎			2012
	同志社大学	文学部	国文学科	◎		○	◎	○	2011
	大阪女学院大学	国際・英語学部	国際・英語学科	◎	○	○		○	2012
教育・教員養成系	近畿大学	文芸学部	英語多文化 コミュニケーション学科	◎	◎	○		○	2011
	椋山女学園大学	教育学部	子ども発達学科	○	◎	◎		◎	2011
	島根大学	教育学部	学校教育課程	◎	◎	◎	◎	◎	2012
	愛媛大学	教育学部	学校教育教員養成課程	◎	◎	◎	◎	◎	2011

◎:進んだ取り組み、○:やや進んだ取り組み ※法・政治学系は該当大学なし

資料出所:河合塾

その中から進んだ取り組みを行っていると思われる20~30学科を毎年抽出して実地調査を行うのである。

図2は、この3年間の実地調査で、実際に優れたアクティブラーニングの取り組みを行っている学科の一覧である。

この表では「評価の視点I」「評価の視点II」「評価の視点III」について、◎:進んだ取り組み、○:やや進んだ取り組みとして評価を行っている。

まず「評価の視点I」では「一般的アクティブラーニング」が、4年間を通じて導入されているかだけでなく、基本的な科目で講義と演習・実験が有機的に連携しているかどうかを評価している。また「高次のアクティブラーニング」が連続して配置され、なおかつ専門知識を活用するように設計されているほど高い評価となっている。「評価の視点II」は、教員のチームワークによるチームティーチングが行われ、組織的に授業の質が保証されているほど高い評価となっている。さらに「評価の視点III」は、学生の自律・自立化を促すための取り組みを評価した。学生が身につけるべき能力を各科目概要(シラバス)等の中で示し、学生がチェックできるようになっているか。また、学生が自らPDCAサイクルを回していけるように援助する取り組みがなされているか、である。こうして得られた評価は、大学の教育力の一面をきわめて明確に示している。

アクティブラーニングは高校においても重要視されるようになり、コラムのとおり実際の取り組みも広がってきている。とすると、当然、高校での学習と大学での学習との接続が問題にならざるを得ない。昨今、さまざまな取り組みが行われている高大接続問題は、まさにこのような教育の変化の文脈の中に位置づいているのである。

Column

高校も「全校を挙げて組織開発と並行して」がこれからの潮流



日本教育大学院講師 河合塾講師
小林昭文先生

私は昨年3月末に埼玉県立越ヶ谷高校を定年退職してから、「アクティブラーニングの伝道師」と呼ばれています。その名の通りに北は山形県から南は沖縄まで全国を飛び回っています。産業能率大学が主催する授業力向上セミナーをはじめ、昨年4月から12月の9カ月だけで研修会講師や模擬授業等に呼ばれた回数は50回を超えました。どの会場でも多くの先生方が集まり熱気にあふれていました。それだけ多くの高校や先生方が、アクティブラーニングに強い関心を持ち、実際にも導入が急速に広がってきていることを実感します。しかも、京都市立堀川高校、三重県立津商業高校、岐阜県立可児高校、神奈川県立藤沢清流高校、埼玉県私立花咲徳栄高校など、進学校や専門高校など様々な特徴を持った学校が、全校を上げて取り組む事例が出現してきています。特に、私は「授業改善と組織開発」を並行して進めなければ効果が低いと主張していますが、それを実践して成功する学校が出てきました。この動きは、今後、ますます強くなると確信しています。